

④8 ぼろんか

明治六年という、新政府は新しい制度を作ったり止めてみたり、世の中はまだまだ混乱して
いた。

近代化を急ぐ政府は、二年も前にチヨンマゲを切るように通達を出したが、日本人の大半は未
練たらたら。ましてやこの田舎でそうやすやすと切れる筈もなかった。

もう一つの大きな気がかりは、小さな寺院は統廃合されるという噂だった。西洋のヤソ（キリ
シタン）の教えや学問が入ってくる。寺院はもとより真宗の教えを受けてきた村人は、言い知れ
ぬ不安を抱えていた。ザンギリ頭の人はヤソだと囁かれていたりした。

そんな世相の三月十日、上河内の峠をこえて二十歳くらいの若者がふらりとやって来て、戸長
だった小坂の富田家へ立ち寄った。

「私は県の役人で探索方の者だが、今村々を巡回しているところだ。なにか変わったことはな
いかね。」

と、尋ねた。たまたま話が断髪令に及ぶと、戸長は、

「昨日も明正寺に高札を立てましたが、いっこうに切るものはござんせん。」
とつぶやいた。

男は、「まだ束髪（そくはつ）のものを集めなさい。」と行って、呼ばれてきた村の上役三・四人のまげをさ
つさと切り落としてしまった。

そして、富田家に泊まり、十一日は戸長と連れ立って、
助生田の副戸長の輔田家に出向いた。

その間に、「あの男はにせものだぞ。」と池田から使者が飛ん
できた。別司の番人が男を捕まえて富田家にもどった。まげを
切られた男たちはいきり立った。何事かと大勢の人が集まって
きて、騒ぎはあつという間に大きくなった。お寺の鐘が打ち鳴
らされた。火が焚かれ、田んぼのもぐさ小屋が燃えた。これを
止めに入った近村のごえんさんもどうしようもなかった。群衆



は富田家と輔田家に乱暴をした。夕闇が迫ってきた。

その夜、明正寺で数人のごえんさんと村役らが話し合った。どんな意見が出たのかはわからないが、ともかく翌十二日の早朝寺々の鐘が打ち鳴らされ、南無阿弥陀仏と書いたむしろ旗を先頭に、竹槍や鍬をもった一団が河和田の谷を西へと下って行った。

「みんな出て来い。出てこんやつはヤソだぞ。家を焼いてしまふぞ。」
と、口々にわめきながら。打ちこわしが始まったのだ。

落井・松成・四方谷を通って庄境・粟田部へ向かった一団は、大区長や豪農・豪商の家々をこわし、大きい寺院に火をつけた。

それは十三日も止まなかった。川島を通り横越のご本山に集まった暴徒らは、

「ヤソ宗を拒絶すること」、「真宗説法を再興すること」、「学校に洋文を廃止すること」の三つの要求を書いて、制庄にかけつけたお上に差し出した。

この要求が受け入れられたと思つた人々は、ホツとして家路を急いだ。

ところが、翌日からお上の厳しい取調べが始まった。一人一人調書をとられ、禁固三ヶ月や

懲役三十日、罰金では三円から七十五銭までがそれぞれに課せられたのである。ちなみに米一俵が一円二十銭くらいだったから、村々は莫大な代償を支払って、維新の大波をはらいのけたのであつた。当時は敦賀県に属していたから、敦賀のにしん倉に捕らわれていた人のために、親戚や隣人が、徒歩で差し入れに出かけたのであつた。

この取調べの最中に、明治天皇はようやく断髪されたという。それほどチヨンマゲを切ることは男にとって一大事だったのである。

④9 キツネに化かされて

キツネの話は、子供のころ、いろいろばたで親父さんから耳にタコができるくらい聞かされたもやん。

キツネには天狐・白狐・管狐・野狐の四つがあつて、年をとると神通力が備わってくるんや。